

隠元禪師の中国での足跡を訪ねて(2)

副幹事長 福田哲也

白峰鎮港着14時丁度、待機していたマイクロバスに乗り込む。暫く走ると2009年に完成した「舟山跨海大橋」(天草パールラインと同じように島から島へ架けられた橋が全部で5橋)が、舟山市から寧波市〔ニンポー〕までを結ぶが、5橋合計の長さは約50kmあるというから驚き。この新路に沿って、寧波市の寧波駅へとひた走る。寧波駅着16時40分。

ここでも走り込むようにして同駅発17時08分「和諧号」(高速列車)に乗り込む(二等座席182元〔約3600円〕)。新幹線700系に似た流線形の車両でビュッフェや個室もあったが、トイレはステンレス製の床に穴を空けただけというものであった。客車には速度掲示板が設けられ時速200km前後の数字が躍っていた。福清市まで約4時間の長旅だが、マイクロバスに比して座席にゆとりがあり、膝の屈伸運動などができたことは有難かった。

福清駅着21時45分(40分遅れ)。下車した瞬間、驚かされる光景に出合う。プラットホームに中国福清黄檗文化促進会の皆さんが出迎えていたのである。私など啞然としているうちに、若い女性が私の旅行ケースを、もう一人の若い男性が肩にかけていたセカンドバックまで剥ぎ取るようにして持ってくれた。この二人、流暢な日本語で「膝、大丈夫ですか…」とほほ笑む。「えっ、なんで俺の膝痛のことを…」と、思う間もなく、「念副会長から膝の悪い福田さんを庇え、と電話がありました。もう大丈夫、安心して下さい」と、二人で私の両腕を抱きかかえるようにしてプラットホームから長い階段を下りて改札口へと導く。人間、落ち込んでいるときほど他人の情が心に沁みる、つい涙腺がゆるむ。想定以上の膝痛で旅行に参加した後悔の念が、この時、一辺に吹き飛ばすような感激を感じる。それにしても日本語(大阪弁や京都弁あり)がなんと達者なことか。

福建省一帯は気象条件に恵まれず、長年、干ばつなどの被害に苦しんできた。そこで新天地を求め移住する移民を輩出した華僑元祖の地であり、500年前より東南アジアを中心に日本の長崎にも江戸時代から福清出身者が多く訪れているという。現在も日本を筆頭にアメリカやオーストラリアなどへの進出者は後を絶たないようだ。そして、「今日は日本に就労した者ばかりが迎えに来たので、日本語は少々…」と謙遜する。

福清駅からは出迎えの車6台に分乗し、中国福清黄檗文化促進会本部へ向かう。到着したのは23時10分。林文清中国福清黄檗文化促進会会長より、「2年前、習近平国家主席の鶴の一声で、この福清黄檗文化促進会が設立されたが、外国のお客を迎えるは貴方たちが最初であり、記念すべき日である」との歓迎の弁。そして地元特産

の福清茶と荔枝〔ライチ〕(楊貴妃が好んで食した果物)のおもてなしを受ける。この後、「傾城倶楽部」に移動し、昨夜に引き続き遅い夕食を摂る。精進料理に酒なしではあったが、昨夜同様、豪華なツイン部屋を一人一部屋あてがわれ、熟睡できた(しかも連泊)。

7月15日第3日目

出発前、林副教授の奥さんご子息がホテルに来る。昨年もこの訪中に参加した史談会のメンバーと再会するために訪ねて来られたのであるが、暫し賑わう。子どもさんは一人っ子政策に則り、息子一人だそうだが、183cmの長身で大学生の凜々しい青年、息子のことを話す林副教授の顔は、終始緩みっぱなしだった。

8時15分同倶楽部出発。この日は黄檗山待望の万福寺と隠元禪師の故郷東林村、そして福清市から約120km離れた山奥にある雪峰寺を訪ねる。我々7名と林副教授、促進会の林会長、念副会長、さらに会員の若者たちが加わり総勢18名の大研修隊、賑やかな道中となる。万福寺では地元の新聞社・テレビ局が待機していた。同行



の若者たちの通訳でインタビューを受ける。(翌16日、史談会訪中の記事が掲載された新聞を頂戴する)。

念願叶っての万福寺、じっくり腰を据えて総門・山門・大雄宝殿・蔵経閣・隠元紀念堂・回向堂などを観て廻る。黄檗独特の建築様式と色鮮やかな色彩に魅せられた。そんな中、広大な境内の片隅に小さな墓が2つ。原田会長によれば「万福寺に寄付を続けてきた山岡容治夫婦の墓」とのこと。それにしても何と小さく粗末な墓だろう。人は先ず己の物心欲が満たされて初めて他人への施し心が生じる、といわれるが、この夫婦はまったく逆のようで、万福寺に全てを捧げてきたことを小さな墓が如実に物語っていた。(つづく)